

# シェーンブルン・マリオネット劇場における 子ども向けプログラムの意義と効用

## The Significance of the Programms for Children of the Marionette-Theatre in Schönbrunn

若宮由美

WAKAMIYA, Yumi

### 1 はじめに

ウィーンにあるシェーンブルン・マリオネット劇場 Marionettentheater Schloss Schönbrunnには、「一般向け」と「子ども向け」のプログラムがある。そうしたプログラムの中から、本研究では「一般向け」と「子ども向け」の両バージョンを有する作品に焦点をあて、2つのバージョンを比較対象することにより、「子ども向け」作品の制作手法と特徴を考察する。そしてさらには、「一般向け」作品を「子ども向け」バージョンに翻案することの意義と効用についても探っていきたい。

### 2 シェーンブルン・マリオネット劇場 の活動とレパトリー

シェーンブルン・マリオネット劇場は、目下のところ、ウィーン13区にあるシェーンブルン宮殿内の劇場を本拠地としているが、公的な団体ではなく、私的な劇団である。1994年にシェーンブルン宮殿内の側翼にマリオネット専用劇場が完成したのを受け、創立者であり、現在も劇場を率いるヴェルナー・ヒアツァー Werner Hierzerとクリスティーネ・

ヒアツァー Christine Hierzer夫妻が、ここに本拠地を移したものである<sup>1)</sup>。それまでは独自の小屋を持たずに、移動劇場などでの活動を30年以上にわたって続けていた。シェーンブルン劇場の座席数は10列全88席で、舞台の横幅は5.8メートル、高さ4.2メートルである。

同劇場は、1994年の移転以来、試行錯誤を繰り返しており、ほぼ毎日の年間興行を行う年もあれば、休日のみに興行を実施する年もあった。しかし、2007年9月からの新シーズンにおいては、通年にわたってほぼ毎日の興行が実施されると発表されており、レパトリーも前年に比べ、数が増えている。現在の同劇場のレパトリーを表1に示す。

レパトリーは全部で12演目となるが、これをジャンルの観点から分類すれば、表1のジャンル欄に示したように、(1)オペラ、(2)ミュージカル、(3)音楽付きの劇、(4)バレエ、(5)降誕劇、(6)音楽教育プログラムの6つに大別することができる。(6)にある「音楽教育プログラム」とは、観客、とくに子どもたちに「旋律」「和声」「拍子」などの音楽の諸要素を理解させながら、音楽作品の総合的な理解を深めさせ、さらには創作活動の領域

---

キーワード：マリオネット劇場、モーツァルト、魔笛、ヨハン・シュトラウス  
Key words : Marionette

表1：シェーンブルン・マリオンネット劇場のレパートリー

作品	ジャンル	対象	上演時間	作品の概要
<i>Die Zauberflöte</i>	オペラ	一般	2時間20分*	モーツァルトによるオペラ
<i>Kinderzauberflöte</i>	オペラ	5歳児以上	1時間15分*	上記作品の簡易版
<i>Ritter Kamenbert</i>	ミュージカル	?	50分	創作劇
<i>Johann Strauss - An der schönen blauen Donau</i>	音楽付き劇	一般	1時間20分*	第1部：シュトラウスの音楽を用いた創作劇；第2部：ドナウ河にまつわる民衆劇
<i>Kinderstrauss</i>	音楽付き劇	5歳児以上	1時間10分*	上記作品の簡易版
<i>Aladdin</i>	音楽付き劇	5歳児以上	1時間15分*	古典作品
<i>Müllaria</i>	音楽付き劇	?	50分	創作劇
<i>Sisi's Geheimnis</i>	バレエ	?	50分	創作台本に基づくバレエ
<i>Eine kleine Nachtmusik</i>	バレエ	一般	30分	モーツァルト作品への振付
<i>Das Schönbrunner Adventspiel</i>	降誕劇	(子ども向け)	50分	創作劇
<i>Schönbrunner Scholssgeschichten "Gespenster gesucht"</i>	降誕劇	(子ども向け)	50分	創作劇
<i>Familie la Musica</i>	音楽教育プログラム	小学生以上	1時間10分*	教育的なワークショップ

※ 上演時間の欄の\*印は休憩1回を含むことを示す（休憩時間は上演時間には含まれない）。

対象の欄に記した（子ども向け）は劇場公表の規準ではなく、作品内容から判断した。

まで踏み込んでいくことを意図した、一種のワークショップ的なプログラムである。この演目の場合には、1時間10分の上演（30分後に休憩をはさむ）後に、子どもの創作活動を支援する活動が付加される。したがって、(6)音楽教育プログラムである〈音楽家一家 *Familie la Musica*〉<sup>2)</sup>は、学校などの依頼に応じて上演、もしくは出張上演する種類のプログラムであり、他の作品とは異質の演目といえる。

次に、(5)降誕劇は、2作ともシェーンブルン宮殿におけるクリスマスの様子を伝える作品であり、上演時期が限定される季節作品である<sup>3)</sup>。降誕劇の2作品は、「子ども向き」と明記されていないが、内容からみるならば、実質的には「子ども向け」の作品である。

残りの演目を眺めた場合、(1)オペラ、(2)ミュージカル、(3)音楽付きの劇、(4)バレエといった分類は、もっぱら作品の性格と作品内における音楽と台詞の割合に応じた分類で

ある。作品論として、作品自体の内的構成を考える上では重要であるが、同劇場のように、録音された音源を用いる場合には、いずれの演目でも、すでにパッケージされた録音に人形の振りを当てていく作業を行う訳であるから、ジャンルの違いはないと考えられる<sup>4)</sup>。むしろ、ここで注目すべきは、作品の題材選択であろう。

オーストリアにある、もうひとつの常設マリオンネット劇場であるザルツブルク・マリオンネット劇場Salzburger Marionetten Theaterが、もっぱらクラシックのオペラやバレエを主たるレパートリーとしている<sup>5)</sup>のに対し、シェーンブルンの劇場は数の上からだけ判断すると、創作劇の割合が約半分を占める。州立劇場であるザルツブルクの劇場は、モーツァルテウム<sup>6)</sup>との共同作業のもとに運営を進めている。その関係上、クラシック作品が演目の主体になることは否めない。しかし一方で、プライベートなシェーンブルンの劇場

は、創設者ヴェルナー・ヒアツァーの精力的な働きによって、彼が演出した新作を多くラインナップに掲げている<sup>7)</sup>。なかでも、シェーンブルン宮殿に暮らした皇妃エリザベートのエピソードを綴った〈シシーの秘密 *Sisi's Geheimnis*〉と2作の降誕劇は、本拠地であるシェーンブルン宮殿を舞台にしている点で、同劇場ならではの立地条件を活かした独自性のある創作劇ということができる。この種の劇は、観光客のみならず、子どもたちにシェーンブルンという宮殿やそこの宮廷生活を教えるという意味も担っている<sup>8)</sup>。

それでは、新作創作劇の音楽に目を向けてみよう。新作劇の音楽は、必ずしも新たに作曲された音楽を使用している訳ではない。クラシックのナンバーだけを配置して劇を構成している演目も4作品存在する<sup>9)</sup>。しかし、この種の演目においても、劇の筋立てを通してクラシック曲に対する新たな視点を与え、観客を啓蒙している点は評価できる。

ここで、現時点で発表されている2007年9月からのシーズンの上演演目を表2に示す。現在までに、2008年1月までの上演プログラムが公表されているが、各演目の上演回数を集計すると表2のようになる。

12作のレパートリーのうち、2007年9月からの5ヶ月に上演される演目はわずか5演目

にすぎない<sup>10)</sup>。計116回の公演のうち、約半分の61回で上演されるのは、モーツァルトのオペラ〈魔笛 *Die Zauberflöte*〉であり、その「子ども向け」簡易版である〈子どものための魔笛 *Kinderzauberflöte*〉と合算すれば、全体の80パーセント以上がこのオペラの上演ということになる。

〈魔笛〉が、この劇場の古くからのレパートリーであり、上演時間が2時間を超す唯一の長大な作品であることを考えれば、同作品が頻繁に取り上げられることの説明はつく。また、創作劇に手を染める前には、ザルツブルクのように、オペラ等の既存作品をマリオンネット用に翻案して上演していたこともその一因であろう。

次に上演頻度の高いのは、〈ヨハン・シュトラウス：美しく青きドナウ *Johann Strauss - An der schönen blauen Donau*〉の計9回（8パーセント）であり、それを簡略化した〈子どものためのシュトラウス *Kinderstrauss*〉が13回（11パーセント）を占める。この作品においては、子ども向けヴァージョンの方が、一般向けヴァージョンよりも多く計画されている。

最後にあげるのは、5歳児以上を対象とする〈アラジン *Aladdin*〉である。9回企画されていて、全体の8パーセントを占める。

5つのタイトルがラインナップされている

表2：2007年9月～2008年1月の上演演目と上演回数

作品	2007年9月	10月	11月	12月	2008年1月	総数	上演比率
<i>Die Zauberflöte</i>	22	22	4	9	4	61回	53%
<i>Kinderzauberflöte</i>	3	2	5	6	6	24回	20%
<i>Johann Strauss</i>	0	0	6	3	6	9回	8%
<i>Kinderstrauss</i>	0	2	3	6	2	13回	11%
<i>Aladdin</i>	2	0	4	2	1	9回	8%
						計116回	

※ 網掛けは子ども向けプログラム

が、〈魔笛〉と〈シュトラウス〉の「子ども向け」バージョンは同一作品の異なるバージョンにすぎないため、実質的には3作品しか常設プログラムには計上されていないとみなすことができる。つまりは、この上演計画から明らかなのは、同劇場がリピーターを想定していないということである。

次に、作品対象という観点から上演回数を観察してみよう。「子ども向け演目」<sup>11)</sup>の興行は46回であり、全体の46パーセントとなる。前掲のザルツブルクのマリオネット劇場では、「子ども向け」演目が学校の休暇期間に散発的にしか上演されない<sup>12)</sup>ことと比べれば、年間を通して恒常的に約半数の興行を「子ども向けプログラム」にあてていることは、シェーンブルンの特徴といえよう。つまり、シェーンブルンにおいては、「一般向け」の興行と「子ども向け」の興行に均等の力が割かれており、近年の傾向をみれば、「子ども向けプログラム」への傾倒が顕著である<sup>13)</sup>。

そこで、シェーンブルン・マリオネット劇場における「子ども向けプログラム」の制作意図と手法を明確化するために、2007年9月～2008年1月までにラインナップされている演目のうち、「一般向け」と「子ども向け」の二本立てのバージョンを持つ2作品、〈魔笛〉と〈ヨハン・シュトラウス〉を抽出し、「一般向け」と「子ども向け」のプログラムの様式的な差異を比較・観察することにする。

### 3 ケース1 〈魔笛〉

#### 3.1 オペラからマリオネット劇への翻案

〈魔笛〉の場合、生身の人間が演じるモーツァルトのオペラをマリオネット劇に翻案する作業がまず行われている。オペラの醍醐味は、物語の面白さもさることながら、歌手が

どのように歌うか、そして役をどのように演じるかに観客の興味は注がれる。音源を録音に頼るマリオネット劇場の場合、あらかじめ準備された最高の演奏をつねに聴くことはできるであろうが、生身の歌手が舞台上で演じる動きや演奏を楽しむといったオペラの鑑賞方法とは別の視点が求められる。シェーンブルンの劇場では毎回公演に先立ち、クリスティーン・ヒアツァーが人形の基本的な動かし方を説明するのだが、そこで強調されるのが、「音楽や台詞にあわせて人形を動かすことの難しさ」である。マリオネットを操る人形師は、人形操作の訓練に膨大な時間を割き、木の人形に生命を与えていくことになる。つまり、マリオネット劇場における人形師の仕事は、パントマイムもしくは「あて振り」を行うことということになる。マリオネット人形は、日本の浄瑠璃人形のように、顔のパーツが動くわけではない。つねに同じ顔つきの人形に人形使いたちが表情を与え、劇場の登場人物の心情を描写していく。観客は、物言わぬ人形が表現する動きや表情に惹きこまれ、物語の世界に想を馳せるのではある。そう考えるならば、マリオネット劇においては劇の題材選択が、観客獲得のための重要な要因となる。

モーツァルト時代のオペラ作品は、物語を進展させる台詞部分と歌手が歌唱力を誇示するアリアの部分から構成されている。モーツァルトが手がけた多くのイタリア・オペラでは、台詞部分もレチタティーヴォとして歌われるが、ドイツ語の歌詞を用いた〈魔笛〉の場合、台詞はすべて語られる。歌われるのはアリアの部分だけである。しかし、18世紀のアリアは同じ歌詞を何度も繰り返すのが特徴である。マリオネット劇の場合、登場人物

がアリアを歌う部分では、人形はただひたすら歌手が歌うしぐさを模倣し続ける。同じ歌詞が反復される時でも、それは同じである。物語を停滞させないためにも、本来ならば、同じメロディーと歌詞の反復は省略することが理想的である。それにもかかわらず、マリオネット版の〈魔笛〉ではアリアの省略はほとんど行われず、忠実に再現される。

〈魔笛〉のオペラの平均上演時間は2時間40分である。他方、シェーンブルンの上演時間は2時間20分であり、同劇場の他の演目と比較にならないほど上演時間が長い。細かく分析してみると、多少の割愛があるものの、ほぼ原作通りに上演されていることがわかる<sup>14)</sup>。主人公（タミーノ、パパゲーノ、パミーナ、夜の女王、ザラストロ）が関与するシーンは温存され、モノスタモスや3人の童子ら、周辺人物のシーンを中心に削除が行われている。削除の手法は、(1)シーン（場面）まるごとの削除、(2)シーンの一部の削除、(3)複数シーンの統合、(4)台詞の省略である。(1)シーンの削除は、モノスタモスによる第1幕第9～11場や、モノスタモスとパミーナによる第2幕第10～11場、3人の童子による第2幕第26～27場などである<sup>15)</sup>。また、(2)シーンの一部を削除していく手法は、第2幕に顕著であり、有名アリアのみを残して、その他の部分が省略されている。例えば、第2幕第1場では、本来冒頭に置かれるザラストロと僧たちの対話はなく、いきなりザラストロのアリアで開始される<sup>16)</sup>。(3)いくつかのシーンを統合する場合には、大幅に台本を簡略化している。第2幕第19～21場がその例である。

上記の3つの方法は、シーンを整理することで劇としての筋立てを明確化することが目的と考えられる。そして、シーンの整理は第

1幕にはほとんどなく、第2幕に集中している点が特徴である。一方、(4)台詞の削除は全体に及んでおり、諸々の箇所でもまんべんなく手が入られている。ただし、これも筋立てを簡明にする手法の一端と考えられる。

結論として、「一般向け」のプログラムは、オリジナル・オペラの流れをきわめて忠実に継承しつつ、物語の枝葉末節をそぎ落として、劇としての筋立てが理解しやすくなっている。また、第1幕を温存し、第2幕を大胆に削除したことで、終幕に向けての盛り上がりはより一層、鮮明化される。

### 3.2 「子供向け」ヴァージョンへの変換

「一般向け」の上演時間2時間20分に対し、「子ども向け」の上演時間は1時間15分であり、約半分の長さである。すでにオペラからマリオネットの「一般向け」ヴァージョンへの翻案で、削除・統合という手法を駆使してしまっている。同じ手法で、さらに1時間分を削ることは難しい。「子ども向け」ヴァージョンでは、原作には出てこない作曲者モーツァルトを登場させ、劇の狂言回しの役割を担わせている。彼の活躍により、大幅な場面の削除が可能になり、削除部分の補足説明を彼に語らせるのである。人物の機微を丁寧に描いた「一般向け」ヴァージョンとは異なり、物語は平明に簡略化され、そこに登場人物の有名アリアが絡められる。こうしたアリアを通して、各登場人物にはまんべんなく焦点が当てられ、人物の相関関係も明確化する。

また、「子ども向け」ヴァージョンでは、オペラの物語性ではなく、モーツァルトという作曲家やオペラに親近感を抱くことができるような構成がとられている。

### 3.3 子どもの受容について

筆者は、〈魔笛〉の「一般向け」公演を2007年3月17日、「子ども向け」公演を2007年3月3日に観劇した。いずれも土曜日の公演であったが、「子ども向け」は午後、「一般向け」は夜の興行であった。「一般向け」公演の客層は、観光客や若いカップルが中心である。一方、「子ども向け」公演には地元のコミュニティーの子どもたちが親と一緒に来ていた。年齢は小学校4～5年生が中心であった。こうしたグループのために開演前には、劇場スタッフが遊びながら、物語の筋立てや主たる登場人物を教えていく。ここで子どもたちは「魔笛ゲーム」で盛り上がり、その勢いのままに劇場へと移行していった。劇の最中には、自分の知っている登場人物が出てきたり、既知のメロディーがでてくると、大喜びで人形とともに歌い、歓声を上げていた。自分たちの断片的な予備知識がひとつにつながっていくことで、劇にますます引き込まれていく様子がみてとれた。小学生高学年の生徒たちは、1時間15分という上演時間を集中して過ごすことができ、劇の内容も十分に理解することができることがわかった。終演後は、有名なアリアのメロディーを口ずさみながら、帰っていった。

## 4 ケース2 〈ヨハン・シュトラウス：美しく青きドナウ〉

### 4.1 作品の構成

〈ヨハン・シュトラウス：美しく青きドナウ〉は、休憩をはさんで第1部と第2部に分けられ、それぞれがまったく異なる性質の内容を持つ。第1部は、ヨハン・シュトラウスの生涯と作品に目を向けた内容であり、作曲家ヨハン・シュトラウスが登場して自分の生い立

ちを説明しながら、有名曲を披露する。ここでは、ワルツ、行進曲、ポルカなど、さまざまな拍子・リズムの楽曲が演奏される<sup>17)</sup>。演奏の最中には、奇想天外なもの、例えば「こうもり」や本来ならば動くはずのない「ヴァイオリン」、「ピーマン」、「靴」といったものがバレエを踊る。表1で第1部を創作劇と表記したが、表面的には劇の体裁をとりつつ、実質的には有名曲の鑑賞が中核をなしている。

第2部はシュトラウスの代表曲〈美しく青きドナウ〉にちなみ、オーストリアに古くから伝わる民衆劇「ドナウの水の精 *Donauweibchen*」が展開される。つまり、物語としての劇が上演されるのである。この物語のあらすじは、以下の通りである。ドナウ河の岸辺に暮らす漁師の息子が、ドナウの水底に住む「水の精」に雪解け水による洪水の到来を知らされ、危機を救われる。その後、息子は「水の精」を忘れることができなくなり、いつしかドナウ河に身を投げる。「水の精」も彼のことを愛おしく思っていたことがわかり、2人の結婚式で幕が閉じられる<sup>18)</sup>。

観客は、第1部では各楽曲を単発的に聴取して楽しむことができるが、第2部では劇に集中することが要求される。全編を通して、ウィーンを代表する作曲家ヨハン・シュトラウスの人物ならびに音楽・そして彼の背景を多面的に紹介するプログラム構成になっていることがわかる。

### 4.2 「子ども向け」ヴァージョンへの変換

〈ヨハン・シュトラウス〉の「一般向け」ヴァージョンの上演時間は1時間20分であり、「子ども向け」ヴァージョンは1時間10分である。〈魔笛〉の場合には、2つのヴァージョンに1時間以上の上演時間の違いがあったが、

〈ヨハン・シュトラウス〉の場合には約10分の差しかない。したがって、本作品では、「子ども向け」の翻案に際して、全編を通じての削除・統合や、短縮のための新たな登場人物を導入するといった手法は採られていない。削除されているのは、ヨハン・シュトラウスの第1部で語られる結婚生活についての箇所だけである。周知の通り、ヨハン・シュトラウスという作曲家は何度も結婚・離別を繰り返した。「一般向け」では、最初の妻との出会いや、3度目の結婚に至るまでのエピソードが描かれるが、「子ども向け」バージョンではモラルの点からそうしたエピソードが削除されているだけである。「子ども向け」バージョンが、多少作曲家を美化しているが、両バージョンに本質的な違いは認められない。

### 4.3 子どもの受容について

筆者は〈ヨハン・シュトラウス〉の「一般向け」公演を2006年3月20日、「子ども向け」公演を2006年3月11日に観劇した。「一般向け」の客層は、〈魔笛〉のケースとまったく同じく、観光客やカップルが主体である。そもそも一般向け演目は夜の興行で行われるため、家族連れが少ない。したがって、「一般向け」の演目のターゲットは、主として観光客や若いカップルである。

一方、土曜午後の「子ども向け」公演についていえば、この公演へのグループの参加はなく、ほとんどが家族連れであった。彼らは地元ウィーンの人たちである。親と子どもという組み合わせだけでなく、祖父母と孫といった関係の家族も多く、子どもの年齢層は5歳児～小学校低学年であった。前述の〈魔笛〉のケースに比べて、あきらかに子どもの

年齢層が低かった。

マリオネット劇場は根本的に劇場が小さいため、舞台を見やすくするための傾斜が観客席にはほとんどつけられていない。5歳児が大人の後ろの席になってしまうと、舞台はまったくみることができない。そのため、座席を高くするためのクッションが配られるが、それでも問題が解決されない場合もある。そうした際には、客席前方の平土間に子どもだけ集めて座らせる配慮がなされる。ここで注目すべきは、子どもたちが集まると予期せぬ相乗作用が生まれるという点である。

筆者が観劇した日に集まった子どもたちは、低年齢層であった。彼らにとっては、ヨハン・シュトラウスが語り部となり、彼のさまざまな楽曲を紹介する第1部は楽しめる内容であったようだ。第1部には物語的要素はほとんどなく、拍子やリズムの異なるシュトラウス音楽が次々に紹介されるだけであるから、音楽をききながら、子どもたちはリズムに反応を示すとともに、荒唐無稽なバレエ、すなわちピーマンや靴が空を飛びながら踊る様子に歓声をあげていた。つまりは、低年齢層の子どもも、現実に起きることと現実にはおき得ないことの区別はできていて、「ピーマンがダンスをする」という意外性を発見しては、それを素直に楽しんでいたのである。幼児が旋律よりもリズムの感覚を先に獲得するということは、すでに諸々の研究によって解明されている<sup>19)</sup>。

しかし、物語が展開される第2部では彼らは完全に飽きていた。約40分の物語でさえ、集中し続けることはできない様子であった。前方に集められた子どもたちのなかで、そうした反応が起きると、他の子どもにも退屈が伝染してしまう。その要因としては、(1)物語

を理解する年齢に達していない子どもがいた、  
 (2) 物語の内容自体が馴染みのものではな  
 かった点があげられる。

シェーンブルン・マリオネット劇場が示す  
 指針によれば、〈魔笛〉も〈ヨハン・シュトラ  
 ウス〉の適応年齢は「5歳児以上」と記され  
 ているが、子どもの発達を考えた場合、両者  
 には適応年齢に根本的な違いがあることは明  
 白である。5歳児には物語性のある演目を十  
 分に理解することはできない。その意味から  
 すれば、〈魔笛〉の適応年齢を小学生以上とす  
 るのが妥当と思われる。

## 5 「一般向け」作品を「子供向け」に翻 案する意義

前章では、「一般向け」作品を「子ども向  
 け」に翻案する手法を細かく観察したが、演  
 目の内容という点から両作品を比較すると、  
 〈魔笛〉と〈ヨハン・シュトラウス〉の様式は、  
 完全に性格を異にする。にもかかわらず、こ  
 の2作は「一般向け」と「子ども向け」のヴァー  
 ジョンを保有する劇場の主力演目になっている  
 のはなぜか。それは、シェーンブルン・マ  
 リオネット劇場がウィーンを本拠にしている  
 ことと関係がある。〈魔笛〉の作曲家モーツ  
 アルトとヨハン・シュトラウスは、「音楽の国」  
 を称するオーストリアを代表する大作曲家で  
 あり、愛国的な精神の象徴であるといえる。  
 しかし、現代においては、若者のクラシック  
 離れは顕著であり、具体的・積極的な方策の  
 ないままでは、今後の伝統の継承が危ぶまれ  
 る段階に至っている。それゆえ、この2人の  
 作曲家に焦点をあてることは、マリオネット  
 劇場のみならず、オーストリアの芸術家や文  
 化人たちにとっては、至極当然のこと、誰も  
 が疑うことのないテーゼなのである。その背

景にあるのは、国の伝統を守るという使命感  
 である。自国文化を保護するためには、大人  
 たちにモーツァルトとシュトラウスの音楽を  
 知らしめることも大事であるし、一方で将来  
 国家を背負う子どもに知識を授ける教育も重  
 要なのだと、彼らは理解している。

ここで2大作曲家と書き記したが、オース  
 トリアにおけるモーツァルトとシュトラウス  
 の認知度には違いがあることは確かである。  
 モーツァルトの知名度の方が圧倒的に高く、  
 愛好者の数もモーツァルトの方が多い。モー  
 ツァルトは学校の教科書<sup>20)</sup>でも大々的に採り  
 上げられ、誰もがその業績を知っている。一  
 方、シュトラウスは年配層に根強い人気があ  
 るものの、教育の場で採り上げることは減多  
 くない。しかし、文化的教養のあるオースト  
 リアの親たちは、モーツァルトだけでなく、  
 シュトラウスも子どもにその存在を知らしめ  
 なければならないという意識を持っている。  
 筆者が〈子どものためのシュトラウス〉を見  
 た日、5歳くらいの女の子が観劇前に母親に  
 向かって、「私はモーツァルトの方が好き」と  
 言った。それに対して、母親は毅然とした調  
 子で、「モーツァルトとシュトラウスは全然違  
 う。シュトラウスも面白いから、今日はそれ  
 をよく探しなさい」と応じていた。

音楽的にみれば、モーツァルトとシュトラ  
 ウスは時代も様式も異なる。しかし、オース  
 トリアの人にとっては、どちらも彼らの精神  
 的な拠り所であって、彼らが積極的に守るべ  
 き伝統的文化の主要部分をなしている。現地  
 の人びとは、2人の作曲家が自分たちの宝で  
 あるという強い信念を持っており、そのこと  
 に疑問を抱くこともないのである。だからこ  
 そ、この2人の作曲家を取り上げた演目が、  
 マリオネット劇場の中核をなしていることも、

当然のことといえる。つまり、オーストリアの事情だということである。

しかし、ここで重要なのは、これらの作品が単なる製作上の都合から、1作品を「一般向け」と「子ども向け」の2つのバージョンに分けた訳ではない、ということである。もともと「子ども向け」に製作されたレパートリーがあるなかで、それらを「子ども向け」演目の柱に据えずに、あえて〈魔笛〉と〈シュトラウス〉を上演するには、それだけの意味がある。大人にも、子どもにも同じ視点の作品を提供しようとする意図は明白である。それだからこそ、「一般向け」と「子ども向け」バージョンを平行して上演し続けていると考えられる。

## 6 文化活動の一翼としてのマリオネット劇

ここで「マリオネット劇の特徴とは何か」という根本的な話に立ち戻ってみたい。人形というものが、大人と子どもに関係なく、ある種の愛玩の対象であり、親近感のある存在であるのは確かである。前述したように、マリオネットは木製の胴体に衣装を着せた人形である。顔の表情を変えることもできない。その人形が、つながれた糸によって操られ、まるで生きているように動くことが人びとの興味を引く。マリオネットの人形師にとって困難であるのは、生あるものの動きを模倣すること、つまり本物らしくみせることであり、反対に生あるものには絶対に不可能な動き、つまり現実にはあり得ない動きが可能であることも特徴のひとつである。シェーンブルン・マリオネット劇場の各演目では、リアリティのある動きと、非現実的な動きが絶妙にミックスされ、「一般向け」バージョンで

も「子ども向け」バージョンでも、劇としての面白さを増幅している。

しかしながら、前述したようなモーツァルトとシュトラウスの啓蒙という目的を考えた場合、マリオネット劇をみただけで、彼らのことを十分に理解したということにはならない。例えば〈魔笛〉にしても、マリオネット劇だけを見ても、モーツァルトが本来オペラとして作曲した作品の真髄にまで触れることはできないであろう。マリオネット劇は遠大な文化活動ならびに啓蒙活動の最終目的ではなく、劇に刺激を受け、そこから次なる文化活動へと目を転じていくための「中間的媒体」と位置づけられる。「子ども向け」マリオネット劇に興味を惹かれて、次にはオペラに足を運んだり、演奏会に行ったりという、積極的な文化活動、すなわち大人たちによる本格的な文化活動へ足を踏み入れるような発展性が期待されている。そして、個人が望めば、オペラや演奏会をはじめ、参加できる次なる活動が1本の線上に多様に準備されているのがウィーンという街の文化環境である。この街では、意識的または無意識のうちに、種々の活動が複合されて豊かな芸術文化を開花させる土壌がすでに準備されている。

とはいえ、劇場をはじめとする、学校外のいろいろな機関で「子ども向け」プログラムに力が注がれている。例えば、ウィーン国立歌劇場では、2003年以来、小澤征爾が子供向けの〈魔笛〉のプログラムを提供し続けている<sup>21)</sup>。ここでも、作品の紹介にとどまらず、オペラという形式やオーケストラについての説明もなされ、子どもたちの音楽への興味を多方面から刺激する工夫がなされている。このプログラムも、より大きな文化活動に参加するための導入の役割を果たしている。他の

劇場においても、子どもの音楽活動を支援するような、さまざまな試みがなされている<sup>22)</sup>。

## 7 むすび

本論では、ウィーンのエーデンブルン・マリオンネット劇場の活動から、「子ども向け」プログラムの意義を探ってきた。モーツァルトやシュトラウスを扱うことには、ウィーン独自の特殊事情が認められた。しかしながら、一般の本格的な文化活動への導入としての「子ども向け」プログラムの有効性は普遍的なものといえる。愛国的意義を排除しても、彼らの活動はわれわれ日本人にとっても参考となるであろう。それが単なる西洋クラシックを紹介する手段として有用であるのか、あるいはクラシックに限定しない分野での「一般プログラム」と「子ども向けプログラム」の関係を見直す端緒となるのかは、今後さらに検討を続けていきたい。

エーデンブルン・マリオンネット劇場は、「一般向け」プログラムとともに、近年、「子ども向け」プログラムに力を注いでいる。クラシックのオペラやバレエをそのままマリオンネット劇に翻案する方式の上演を続けているザルツブルクのマリオンネット劇場とは、活動の基本姿勢に明確な違いがある。今回対象から除外した「子ども向け」プログラムについても観察を広げていきたいと考えている。

クラシック音楽やオペラの導入となるべきプログラムには、さまざまなアプローチがある。子ども向けのマンガ解説書なども多数世に出回っている。しかし、マンガが伝えることができるのは物語のあらすじだけであり、音楽に触れるためには別のアプローチが不可欠である。その点からすれば、マリオンネット劇のアプローチは総合的かつ多面的であり、

音楽的体験が観劇の主体とならないまでも、そのエッセンスを体感できるという利点がある。そして、幼児期・児童期の豊かな体験は、大人になってからの文化体験をより成熟したものにする上で欠かすことできない基盤となる。多文化が混在する日本では、明確な方向性を持つ発展的な文化活動を組織・構築することが難しい面もあるが、個々の活動が散発的に終わることなく、種々の活動が連携して、豊かな広がりを生むような土壌作りも必要であろう。

## [注]

- 1) エーデンブルン宮殿は1695年にハプスブルク家の皇帝レオポルト1世が、夏の離宮として建築し、マリア・テレージアの治世（1740-80）に現在の形が完成した。マリオンネット劇場は、両翼の幅が180メートルに達する宮殿中央の建物ではなく、右翼と平行した建物内にある。
- 2) この作品では、寓意的な名前の人物、「パパ・ドレミ」「ママ・ファソラ」「伯父タクト（拍子）」「伯母ハーモニー」「いとこ・メロディー」などが登場する。作曲への導入としては、作曲法の教授という堅苦しい形式ではなく、実践的なパターンを多数提示する方式が採用されている。
- 3) 〈エーデンブルンの降誕劇 *Das Schönbrunner Adventspiel*〉は、エーデンブルンで遊ぶ子どもの前で、キリスト誕生の劇が繰り返られるという設定である。〈幽霊のエーデンブルン訪問 *Schönbrunner Schlossgeschichten "Gespenster gesucht"*〉では、エーデンブルンのスター、サクソSaxoが幽霊たちを仮面舞踏会に招く。
- 4) Minniearによれば、「20世紀初頭に設立された多くの人形劇用常設劇場では」、「ライブ」、つまり生演奏が主流であったとあり、「近年では、ザルツブルクのように、コストの削減とレパートリーの拡大のために、録音と用いるようになった」とされる（MINNIEAR 1992: 1179）。しかし、

## シェーンブルン・マリオネット劇場における子ども向けプログラムの意義と効用

今日では録音使用が主流であり、生演奏による上演はほとんど行われていない。生演奏であるか、録音を使用するかという点は、マリオネット劇の作品様式を変質させたとみることができる。

- 5) モーツァルトの生地ザルツブルクを本拠とするザルツブルク州立マリオネット劇場は、1913年に彫刻家・教師であるアントン・アイヒャー Anton Aicher により設立された。当初は主として子ども向けのカスパール劇（主人公カスパールが登場する即興劇）を上演してきたが、モーツァルテウムとの共同により、モーツァルト・オペラを多く手がけるようになる。1971年からモーツァルテウム隣の劇場に本拠を移した。劇場は20列で336名を収容することができる。シェーンブルンの劇場と比較した場合、収要人数は約3倍である。当然ながら、劇場が大きいザルツブルクは、シェーンブルンよりも舞台と人形の大きさも大きい。レパトリー拡充のためにモーツァルテウムと連携しているため、13作品に及ぶ演目の大半をクラシックのオペラが占める。オペラ作品としては、モーツァルトの〈フィガロの結婚〉〈後宮からの誘拐〉〈ドン・ジョヴァンニ〉〈魔笛〉、ロッシーニの〈セヴィリアの理髪師〉、オッフェンバックの〈ホフマン物語〉、フンパーディングの〈ヘンゼルとグレーテル〉、オペレッタ作品にJ. シュトラウスの〈こもり〉がある。その他にはメンデルスゾーンの〈真夏の夜の夢〉、チャイコフスキーの〈くるみ割り人形〉、プロコフィエフの〈ピーターと狼〉、〈サウンド・オブ・ミュージック〉、そして〈モーツァルトとの1時間〉（モーツァルト音楽を使用した創作劇）といった演目がある。全体的にクラシックの演目を扱っており、上演時間2時間程度の一般向けの上演が年間を通じて行われている。上演回数は年間約160回である。
- 6) モーツァルテウムは、モーツァルトを記念して設立された団体で、モーツァルト研究の総本山である。
- 7) ヒアツァーはすべての創作劇に、構想、台本、演出、振付のいずれかの立場（兼職あり）で関わりを持っている。
- 8) 国が管理・運営するシェーンブルン宮殿の機構

内には、体験型の「子ども博物館Kindermuseum」が併設されており、子どもに宮廷での生活を体験・理解させるプログラムを提供している。マリオネット劇場は私的団体ではあるが、同宮殿を舞台にした降誕劇や〈シシー〉のプログラムは、そうした一連の活動とも連携している。

- 9) 劇場で既存曲のみを使用した創作劇に、〈ヨハン・シュトラウス〉（ヨハン・シュトラウスの音楽）、〈子どものためのシュトラウス〉（ヨハン・シュトラウス）、〈ミュラリア *Müllaria*〉（ペートーヴェン、チャイコフスキー、ロッシーニ等）、〈シシーの秘密 *Sisi's Geheimnis*〉（シューベルト、ランナー、シュトラウス）がある。
- 10) 12月の演目に、降誕劇が含まれていない。
- 11) 〈子どものための魔笛〉、〈子どものためのシュトラウス〉、〈アラジン〉。
- 12) ザルツブルクのマリオネット劇場における「子ども向けプログラム」は、〈魔笛〉〈くるみ割り人形〉〈ヘンゼルとグレーテル〉の3演目である。これらはすべて、上演時間が2時間以上かかるフルバージョンを1時間10分程度に短縮したものである。そして、これらの「子ども向けプログラム」は、学校の休暇期間、すなわち夏休みとクリスマス休暇（あるいは冬休み）にのみ上演されている。
- 13) この傾向は、新作劇の作風や「音楽教育プログラム」の導入からも証明される。
- 14) 〈魔笛〉の場合、オペラを原作通り上演するスタイルは、ザルツブルク・マリオネット劇場でも継承されている。削除の箇所と手法も類似している。
- 15) この他、第1幕第13場のパミーナの独白、第2幕第6場のババゲーノと僧のシーンも削除されている。
- 16) この他、第2幕第8場、第2幕第15場、第2幕第30場も同様である。
- 17) 第1部の楽曲は、〈美しき青きドナウ〉〈最初の楽想〉〈ラデツキー行進曲〉〈騎士パースマーンのチャールダーシュ〉〈いぬサフラン〉〈ピッツィカート・ポルカ〉〈チクタク・ポルカ〉〈加速度円舞曲〉である。
- 18) マリオネット劇では結婚式というハッピーエン

ドであるが、昔からの伝承では、漁師の息子が「ドナウの水の精」（あるいは「魔女」）にとり憑かれ、ドナウ河へ身を投げ、行方不明になるという悲劇で話が締めくくられる。

- 19) 2006年のモーツェルト生誕250年を記念して、モーツァルトを教育するための学校教科書がいくつか出版され、全国の学校で使用されている。
- 20) これについては、HARGREAVES 1986 : 95-97 を参照のこと。
- 21) 年1回開催されるオペラ座舞踏会では、劇場のすべての座席が撤去される。舞踏会翌日、座席のない平土間に小学生を招き、舞台と客席の隔たりのない関係で、「子ども向け」に音楽やオペラの楽しさを伝えている。
- 22) 例えば、アン・デア・ウィーン劇場では、市内の学校と共同で“Musik zum Anfassen”（「実際に触れてみるための音楽」の意）というプログラムを実施している。このプログラムの目的は、同劇場の新作オペラに子どもの関心を向けさせるためのものであるが、物語の筋を教え込むという通り一遍の説明に留まらず、新作オペラの内容を子どもなりに解釈させ、彼らによる新たな舞台パフォーマンスとして再構築させている。

### [参考映像・DVD]

- MOZART, Wolfgang Amadeus
- 2006 *Die Zauberflöte von Wolfgang Amadeus Mozart*. Wien: Marionettentheater Schloss Schönbrunn; Hietzer & Partner OEG.
- 2006 *Die Zauberflöte für Kinder: Live aus der Wiener Staatsoper*. Wien: ORF- Enterprise.
- 2006 *Die Zauberflöte*. Salzburg: Salzburger Marionettentheater.

### [参考文献]

- チップス・カンパニー（絵）
- 1984 『モーツァルト 魔笛』 in 『まんがオペラ・シリーズ Vol. 3』 東京：音楽之友社。
- Csampa, Attila; Holland, Dietmar
- 1987 『モーツァルト 魔笛』 in 『名作オペラ・ブックス5』 海老澤敏; 畔上司（訳） 東京：

音楽之友社。

- EKKER, Ernst A.; EISENBURGER, Doris
- 1998 *Johann Strauß: Eine musikalisches Bilderbuch*. Wien; München; Betz: Annette Betz Verlag.
- HARGREAVES, David J.
- 1986 *The Developmental Psychology of Music*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小林芳郎（訳）『音楽の発達心理学』 東京：田研出版株式会社。
- KASPAR-LOCHER, Ursula
- 1986 *Die Zauberflöte*. Zürich: Sper Verlag.
- KERN, Renate; KERN, Walter
- 2006 *MOZART für die Schule: Singen, Musizieren, Bewegen, Gestalten: Eine Materialsammlung für den Musikunterricht ab der 3.Schulstufe*. Rum/Innsbruck; Esslingen: Helbling.
- MCCORMICK, John; PRATASIK, Bennie
- 1998 *Popular Puppet Theatre in Europe, 1800-1914*. Cambridge: Cambridge University Press.
- MAILER, Franz
- 1999 *Johann Strauß. Kommentiertes Werkverzeichnis*. Wien: Pichler.
- MINNIEAR, John Mohr
- 1992 “Puppet opera“, in SAIDIE, Stanley (ed.) *The New Grove Dictionary of Opera*. 4 vols. London: Macmillan. Vol.3: 1177-1179.
- つづき, 桂子
- 2004 『世界の名作オペラ2：魔笛、ヘンゼルとグレーテル、フィデリオ』 東京：本の泉社。
- 植田, 敏郎（編著）
- 2006 「ドナウの水の精」 in 『世界の恐ろしい話 改訂版: 民話と伝説 呪いの巻物12』 東京：偕成社。